№６１
令和５年１２月１日
発行　多治見市教育研究所

URL: http://school.city.tajimi.lg.jp/kyoiku/
本誌は、多治見市教育研究所ホームページ上でもご覧いただけます。

巻頭言

３つの角度から

多治見市教育委員会　教育長　仙石　浩之

作者の気持ち？

ある中学校での教育長訪問の一コマです。国語の授業で魯迅の『故郷』が題材となっていました。30 年ぶりに帰った故郷、再開したヤンおばさんは、昔の美しい面影をなくしていた上に、心まで荒んでいて、主人公を戸惑わせます。

教師は問います。「作者が、この変貌したヤンおばさんを登場させた意図は何だろうか・・・。」

すごい!! 日清戦争や辛亥革命の混乱など、社会の変容をヤンおばさんに投影した作者、そこを論じるのは文芸批評の領域です。

ほどなく次の教室へ移ることになり、その後のやりとりまで見届けることはできませんでした。

自分が中学生のとき、登場人物の心情を読み取ることはあっても、時代背景を踏まえて作者の意図を読み取ることまでできただろうか。自身の思春期を振り返る機会となりました。

出題者の気持ち？

作者の気持ちを考えるようになったのは、高校時代でした。現代国語の授業でもその視点が入ってきました。正直、苦手分野でした。「どんな解釈をしようが、読者の勝手ではないか。」と独りよがりな言い訳をつぶやいていたのです。現代国語の点数は上がりませんでした。

あるとき、受験雑誌に著名な予備校講師の文章が載っていました。おおまかな趣旨はこうです。・・・長文読解にあたっては、「登場人物の気持ち」「作者の気持ち」だけでなく、「出題者の気持ち」も推し量ってほしい・・・。

私にとっては「ブレイクスルー」でした。出題者はどんな意図でこんな問題をつくったのか・・・。不思議なもので、出題者の気持ちを推理すると、それまで曖昧だった「登場人物の気持ち」や「作者の気持ち」まで立体感を伴って浮かび上がってきたのです。

現代国語の長文読解は、登場人物、作者、出題者（先生）、この「3つの角度から」考える。そんな習慣が身に付きました。

それは、市役所の仕事に就いた後でも役立ちました。当事者（市民）の気持ち、担当者（職員）の思いだけでなく、制度をつくった人の意図を想像するなど、少なくとも「3つの角度から」見ると、問題の所在が立体的になりました。

よろしくお願いします

第3次多治見市教育基本計画では、目指す子ども像を「お互いを尊重し、主体的に学び、挑戦する多治見の子」としています。これをひとつの角度からの視点とすれば、あと2つ、別角度の視点が必要です。

「お互いを尊重し、主体的に学び、挑戦する多治見の**教員**」、そして「お互いを尊重し、主体的に学び、挑戦する多治見の**教育長**」・・・10 月に着任しました。頑張りますので、よろしくお願いいたします。